



Title	ハイラーの祈り論をめぐって
Author(s)	宮嶋, 俊一
Citation	基督教學, 51, 44-47
Issue Date	2016-07-22
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/70082
Type	journal article
File Information	03_miyajima.pdf



ハイラーの祈り論をめぐって

宮 嶋 俊 一

一. 関心の所在

『祈り』(Das Gebet. Eine religionsgeschichtliche und religionspsychologische Untersuchung, München 1918, 1. Aufl.)で展開されたフリードリッヒ・ハイラー(Friedrich Heiler)の祈り論は、今日の我々からすれば実証的とは言い難く、そこに彼自身の祈り(宗教)の理想が色濃く反映しているのではないかと批判されてきた。そうした批判は無視できないものの、『祈り』は今日においても「祈り」という宗教現象について考察する際の一助となりうると思われる。

二. 『祈り』

『祈り』はその構成上「序論」、「祈りの諸類型」、「祈りの本質」の三部分に分けられ、それぞれが「祈り研究のための方法論」、「祈りの類型論」、「祈りの本質論」を扱っている。量的にも質的にもその中心をなしているのは「祈りの類型論」であり、またその結論に当たるのが「祈りの本質論」である。なお、類型論の内容は、次の通りである。

A. 未開人の素朴な祈り／B. 儀式の祈りの決まり文句／C. 讃歌／D. ヘレニズム文化宗教の祈り／E. 哲学思想の祈り批判と祈りの理想／F. 偉大な宗教的天才の個人の信仰における祈り／G. 偉人(詩人、芸術家)の個人の祈り／H. 礼拝における会衆の祈り／J. 戒律宗教における宗教的義務と善き業としての個人の祈り。

三. 祈りの類型史的展開

ハイラーの「祈り」論の構造を理解するためには、その類型史的展開に着目するのが有効である。類型Aから類型Jは歴史的な展開として位置づけられているとされ

るが、その中でも類型E「哲学思想の祈り批判と祈りの理想」にまず着目する。^① この類型Eでは、哲学者による合理主義的な祈り理解が批判されている。そこで批判の対象とされる合理主義は類型A、Fの情熱性に対応する。それに加え、幸福主義に対する反幸福主義、実在主義に対する非実在主義がその特徴とされており、この類型Eによって示される「合理主義」は、類型A、Fに見られる「素朴な祈り」に（超歴史的に）対立している。ハイラーが理想とするのは、素朴な個人の心情の吐露としての祈りである。そして、類型Aの未開宗教から古代宗教へ、また類型Fの（旧約聖書の時代や）宗教改革期から近現代へと二つの歴史的展開を念頭においた歴史モデルが存在する。つまり、類型Eを中心として、類型Aから類型D、類型Fから類型Jの間に価値評価的にも、また分量的にもパラレルな関係がある。そこには、合理主義／非合理主義という対立軸が存在しているのである。その軸を中心としつつ、さらに個人の祈りと集団の祈り、「自由な心の吐露としての祈り」と「規定された、硬直化した祈り」という対立軸が加わる。^②

個人の祈り／集団の祈りという対比は類型A（個人）から類型B（集団）への移行、また類型F（個人）から類型H（集団）を経過して類型J（個人）への移行に示されている。

また、「自由な心の吐露としての祈り」と「規定された、硬直化した祈り」という対比であるが、「未開人の祈り」は、無文字社会の祈りであるがゆえに、「自由な心の吐露」であると見なされる。全体としてみれば、祈りの展開史は「自由な心の吐露」としての祈りから「規定され、硬直化した祈り」へ至るプロセスとして描かれる。

この展開のプロセスは、キリスト教史をモデルとしている。すなわち原始キリスト教から古代キリスト教へ、さらに宗教改革期を経て現代に至るまで、祈祷行為の制度化と、宗教改革者（「宗教的天才」）による硬直の打破というプロセスが繰り返されてきたとされる。さらにそのようなプロセスが「本当の祈り」から「墮落形態」への変化として描かれる。このような展開史はキリスト教において、さらには数多くの創唱宗教において一定の妥当性を有する。つまり教団が制度化されていくにつれて、

儀礼が整備され、それと同時に祈りも「自由な心の吐露」から「規定された祈り」へと移行していくというプロセスである。

四 考察とまとめ

このような祈りの類型史は確かに興味深いが、最終的にハイラーはそうした宗教性に自らの宗教的理想（福音主義的カトリック性）を読み込む。ハイラーによれば、祈りはその展開史の中で「自由な心の吐露」から形骸化・因習化し本来の生き生きとした「祈り」ではなくなるが、（主としてキリスト教における）「宗教的天才」の祈りにおいて、再び生き生きとする。そこに、ハイラーは教会制度（＝既存のキリスト教という枠組み）に囚われないキリスト教的宗教性（福音主義的カトリック性）を見出す。³これはハイラーの「理想」であった。ここでハイラーが言う「祈り」とは特定の宗教的形式によるものではない。ハイラーにとって「祈り」の理想は「自由な心の吐露」であった。つまり、苦悩を苦悩として、あるいは懇願を懇願として、またさらに感謝を感謝として口に出すこと、それこそが「祈り」であり、形式化（形骸化）した祈りはむしろ批判の対象とされた。

だが、非宗教的な心情の吐露を「祈り」と見なすことが出来るか、「祈り」が宗教的な現象であるとすれば、何らかの形式的な枠組みが必要となるのではないか、そうした形式のない自由な表現を「祈り」と見なせるとして、それを「宗教」現象と見なしうるのか、もしそうであるなら、本人がそう自覚していないにも関わらず誰しもが「宗教的人間」ということになるのか、「宗教」という言葉に問題があるなら、それを「スピリチュアリティ」と言い換えれば、問題は解決するのか。ここで私たちは「宗教」概念の問題に直面せざるを得ないのである。だが、むしろそれが「宗教」か「スピリチュアリティ」か、といった問題に拘泥するのではなく、また「本当の祈り」や「墮落した祈り」といったあからさまな価値評価をするのではなく、その形態や内容に着目することで、「祈り」の比較研究へと向かうことこそが必要であり、「祈り」はそのための足がかりとして重要なテキストであると言えるのである。

注

(1) 拙稿「ハイラーの『祈り』における「哲学者の祈り」について」、『神奈川大学国際経営論集』第二九号、一九五
—二二二頁、二〇〇五年三月を参照。

(2) 拙稿「ハイラーの『祈り』における祈りの儀礼化について」、『大正大學研究紀要』通号九〇号、一一一—一二〇頁、
二〇〇五年三月を参照。

(3) 拙稿「ドイツ・ヴァイマル期における宗教思想と宗教
運動——ハイラーの福音主義的カトリック性と民族社
会主義」『大正大學研究紀要』通卷九五号、一一九頁、
二〇一〇年を参照。